

当院では、人生の最終段階における医療・ケアの提供において、多職種から構成される医療・ケアチームで患者等に対し適切な説明と話し合いを行い、患者本人の意思決定を尊重した医療・ケアを提供しています。今回は地域包括ケア病棟(5階病棟)でのエピソードを紹介させていただきます。

Episode : ウエディングドレス姿での面会

『叶わないかもしれないけど、できればもう一度、家に帰りたい
そして、10月にある三女の結婚式に出席することが一番の願い』

この言葉は、肺癌ターミナル期の70代男性A氏の「思い」です。
当時A氏は呼吸状態も徐々に悪化し、苦痛も強く、家族も看取りの覚悟をされている状況でした。
A氏の思いに寄り添い「一番体調の良い時期に自宅へ帰ろう」という目標を定め、
医師、特定ケア看護師、病棟看護師、介護福祉士、退院支援看護師、リハビリスタッフが連携しA氏と家族を支援しました。地域の訪問看護師(Co.cocoリハビリ訪問看護ステーション様)や、ケアマネジャーとも連携して、カンファレンスを繰り返しました。日々A氏の思いを傾聴し、家族の不安を和らげながら調整を行い、2週間という期限を決めて自宅退院を実現することができました。
その間は地域の訪問看護師だけでなく、当院の看護師も一緒に退院後訪問を行いました。入院中に最も信頼関係が築けていた受け持ち看護師が訪問することで、症状の観察及び不安の軽減ができ、A氏の闘病意欲も向上できました。A氏は、呼吸状態が悪化することなく、「たくさんの家族と住み慣れた自宅で過ごすことができた」と笑顔で再入院されました。

また、令和6年5月には三女の婚約者、婚約者のご両親との顔合わせを病院で行いました。
A氏には顔合わせとだけ伝えてありましたが、サプライズでウエディングドレス姿を披露しました。
ベッド上ではありましたが、念願のウエディングドレス姿を見ることができたA氏は
「ありがとうね、バケツ1杯の涙が出た。綺麗だった。見られてよかった」と大変喜んでいました。



——— 残念ながらA氏は令和6年7月に妻、3人の娘や孫達に見守られながら永眠されました。

A氏の一番の願いであった10月の結婚式には出席できませんでしたが、A氏の家族からは当院の支援に大変感謝して頂きました。今後も、患者の価値観に少しでも寄り添うことのできる病院、地域に必要とされる病院を目指して医療・ケアを提供していきたいと思ひます。